

## 第一章 サツマイモが川越地方に来るまで

### ◆ コロンブスの贈り物

サツマイモの原産地は、メキシコ南部からペルーにかけての熱帯アメリカとされている。そこでのサツマイモは、今から七千年以上も前から住民の食べ物の一つとして栽培されていたようである。

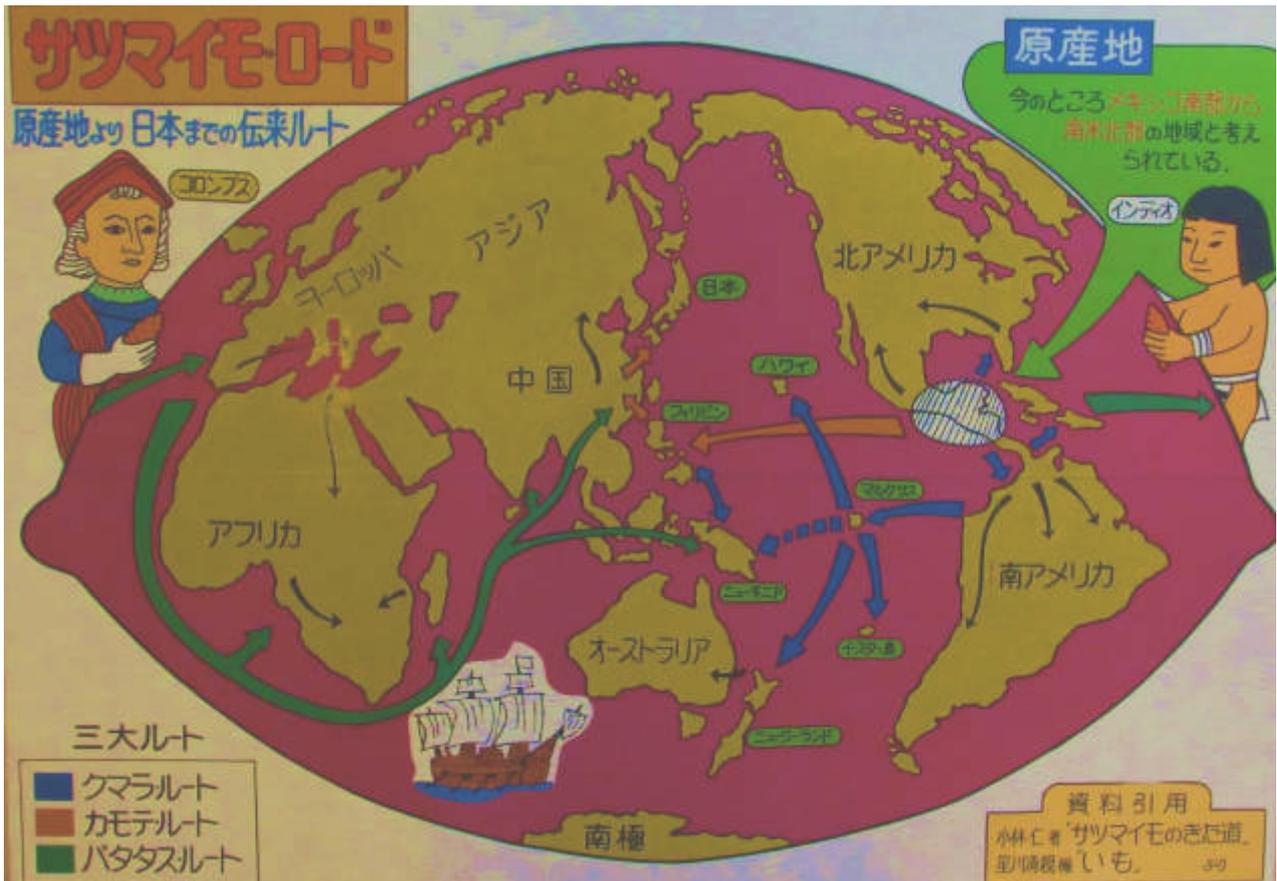
それをヨーロッパに伝えたのが、コロンブスだった。航海家のコロンブスは一四九二年のこと、スペイン女王、イサベルの後援により西インド諸島に到達することができた。そこにはヨーロッパになかった、珍しいさまざまな物があった。

コロンブスは大喜びで、それをヨーロッパに持ってきた。その中のイモ類では、ジャガイモもサツマイモもあった。前者は夏でも冷涼なヨーロッパの気候に合っていたから、そこに定着することができた。

だが、熱帯原産のサツマイモはそこに合わず、航海船を通して、アフリカ経由でインドや東南アジアに入った。

### ◆ フィリピンのサツマイモ

東南アジアでサツマイモ栽培が盛んになったところは、農耕にとっての地力が低いだけで



「サツマイモ資料館」に展示されていたサツマイモ伝来ルート図（山田英次氏作成）。

なく、台風による農作物の被害が多  
いところだった。

コロンブスの航海を支援したスペインは、中南米諸国を次々に征服し植民地にした。さらにアジアのフィリピンにも進出し、そこも植民地にした。そしてメキシコの太平洋岸の港町、アカプルコとフィリピンのルソン島の中心地、マニラを結ぶ太平洋航路を開いた。そのマニラに、メキシコ産の銀貨をたくさん持ったスペイン商人たちが続々とやって来た。

かれらのねらいは、中国南部の商人たちが中国船でマニラに持つてくる陶磁器・絹織物・茶などの買い取りだった。銀貨で中国名産のさまざまな商品を買ひ、それをヨーロッパに運んだ。その交易で大もうけをすることができた。

そのためにマニラにやって来た中

国商人の一人、陳振竜ちんしんりゆうは他の中国商人たちとまったく違っていているところがあった。マニラ郊外の農民たちが「カモテ」と言っていた珍しいものの畑を見て直感した。それは自分の故郷である、中国南部農家の苦しい暮らしも助けられるものに違いないと。

それで商売をやりながら、その珍しい作物の特徴を調べはじめた。するとそれは、地力の低いところでも良くできるだけでなく、どんなに大きな台風にも負けない強い作物であることがわかった。しかも食べてみると、甘くておいしいものだった。

メキシコでのサツマイモの呼び名は「カモテ」である。それがフィリピンに直接入ったから、そこでもその珍しい作物は「カモテ」と呼ばれていた。振竜はそのたくましいイモの性質を知って喜んだ。それを郷里の農民にも、ぜひ作らせたいと思うようになった。中国南部の畑も痩せ地やせちが多かっただけでなく、台風による飢饉の多いところだったからである。

それで、そのツルを持って帰国するとすぐ、地方行政の役所に行った。そして役人にこう頼んだ。「これは農家のためになるものです。ぜひ、普及活動を始めてください。農家の暮らしが楽になるはずですよ」と。それがきっかけとなり、中国南部地方でもサツマイモ栽培が盛んになった。

#### ◆ 琉球王国の野國總管のぐにそうかん

沖縄もフィリピンや中国南部と同様で、台風による飢饉の多いところだった。琉球王国時代のそこは中国への朝貢国ちようこうこくの一つだったから、ときどきそこへの貢物を贈るための使節団を出していた。その航路は那覇なはと中国南部の福建省福州を結ぶもので、そのための「進貢船」

も持っていた。そしてその船の事務長を「總管そうかん」と呼んでいた。

一六〇五年に那覇港に帰ってきた進貢船の總管は、沖縄本島の嘉手納町野国地区かてなのくにの人だった。だが、残念なことに、その実名は伝えられてこなかった。嘉手納町の元教育長、伊波勝雄先生はその解明に尽力されただけでなく、その總管の気持が、それ以前の總管たちとまったく違っていたことを明らかにされた。

それは「台風と夏の日照りによる沖縄農民の苦しみを、少しでも楽にしてやりたい」という強い気持の有無であったと。

野國總管は福州に着いてすぐ、そこに入ってからまだいくらかもたっていないかったサツマモ畑を見て直感した。「これだ。沖縄農家の苦しい暮らしを救える物は」と。

だからそのツルを鉢植えで持って帰国した。そしてさつそく、郷里の野国村での試作を始めた。それを王府の田地奉行、儀間真常ぎましんじょうが聞きつけ、野国村にきた。そして總管が中国から持ってきたサツマイモのツルを分けてもらった。それを使い、沖縄にもっとも合う栽培法の研究を始めた。それを数年続けてみてわかった栽培法を農民に伝えた。

王府の高官が本気になって主導したサツマイモの普及は速かった。わずか十数年で、どの農民もサツマイモを作るようになり、常食にするほどの食べ物になった。

沖縄で「イモ」と言えば、「サトイモ」のことだったが、サツマイモはそれより作りやすかっただけではない。単収たんしゅう（単位面積当りの収量）がサトイモより、はるかに多かった。それで「イモ」と言えば、「サトイモ」ではなく、「サツマイモ（唐いも）」のことになった。

## ◆薩摩藩のサツマイモ事情

沖縄でのサツマイモ栽培の普及は速かったが、九州でのそれは百年もの長いあいだ進まなかった。そのわけは二つあったとされている。

江戸時代になり幕藩体制が確立してくると、どの領主も年貢の対象である「コメ」の増産政策に全力を注ぐようになった。だから年貢の対象には、とてもなりそうもないサツマイモへの関心は薄かった。

また、農民側にも問題があった。それは作りなれない作物には手を出したくないという保守的な傾向だった。

それでも沖縄にサツマイモが入ってから百年近くたつと、新しい動きがやっと出た。一六九八（元禄十一）年のこと、種子島の領主であり、薩摩藩の重臣でもあった島津久基しまづひさもとが、琉球王・尚貞に頼んでサツマイモの種芋を手に入れた。それを種子島の家臣に渡し、ここでの試作をさせてみた。すると良いイモがたくさん取れた。それがきっかけとなり、薩摩藩の支配者側もサツマイモにやっと関心を持つようになった。

さらに一七〇五（宝永二）年のこと、こんどは指宿地方いぶすきの半農半漁の人、前田利右衛門が仕事で渡った沖縄本島から種芋用のサツマイモを持ってきた。その地方も台風と夏の日照りによる農作物の凶作の年が続いていたからである。

それでさつそくそのイモの試作をしてみると、やはり結果が良かった。それからの利右衛門は毎年、サツマイモ苗をたくさん作り、近隣の村々に配った。

おかげで薩摩藩内では、藩側からも、農民側からもサツマイモ栽培熱がようやくよく興った。

それが痩せ地と天災だけでなく、高率の年貢制度でも苦しめられていた農民の救いになった。

#### ◆ 長崎地方のサツマイモ

九州でのサツマイモ栽培の先進地になったのは、上述の種子島と長崎地方だった。一六〇五年のこと、長崎県の平戸ひらとにあったイギリスの商館長、ウイリアム・アダムスは琉球王国産のサツマイモを手に入れて試作した。その畑は今も保存されていることから、長崎地方も早くからサツマイモ栽培が始まっていたことがわかる。

# 関東(江戸)への サツマイモ伝来ルート



しんこうせん  
進貢船



一六〇五年に野国総管は、  
中国の福建省よりサツマイモを  
沖縄にもちかえり、ひろめた。

## ◆ 享保の大飢饉

江戸時代中期の一七三二（享保十七）年のこと、イネの大害虫である「ウンカ」の異常大発生により、中国・四国・九州のイネが全滅状態になった。それは享保の大飢饉だった。そのため西日本では、数え切れないほど多くの餓死者が出た。

だが、薩摩藩内と長崎地方だけは、そうなる少し前頃からサツマイモ栽培が盛んになってきたようである。おかげで、そこでは一人の餓死者も出さずに済んだとされている。それが世間に知れ渡り、全国的なサツマイモ栽培熱が興った。

ときの第八代将軍、徳川吉宗も、足元の関東でもサツマイモ栽培を盛んにさせなければならぬと思うようになった。そのときタイミングよく現われたのが、江戸の町儒学者・青木昆陽だった。

もともと、関東各地にたくさんあった幕府領の代官たちの中には、享保の大飢饉前からサツマイモの種イモを配下の農民に配っていた人がいた。

今の埼玉県内では、その二例がわかっている。さいたま市大門宿と飯能市小瀬戸の代官がそれだった。だが、西日本の温暖なところは違い、関東の冬は長いし、寒気も厳しい。進歩的な代官たちにもそれに対する特別の配慮なしの試作の難しさまでは分かっていなかった。

村の名主クラスの者たちに種イモを配り、その試作結果を報告させていただけだったから、「仰せのようにやってはみましたが、うまくいきませんでした」という報告書の控えが残っているだけで終わっていた。

## ◆ 江戸の甘藷先生

「甘藷先生」とまで言われるようになった青木昆陽は、江戸の魚問屋の子として生まれた。だが、学問を好み、家業を継がなかった。京都へ行き、伊藤東涯いとうとうがいの塾で学んだ。江戸にもどってからは町奉行、大岡越前守忠相配下の与力、加藤枝直かとうえなおの地所内で私塾を開いた。

世話好きの人だった枝直は、誠実で学識豊かな昆陽を幕府に仕えさせたいと思うようになった。そのことを上司の大岡越前守に話すと、「それなら、その者に日ごろ思っていることを書かせて提出させよ」となった。それで昆陽が漢文で書き、提出したのが『蕃藷考』だった。

それは中国の明時代みんの学者、徐光啓（一五六二〜一六三三）著『農政全書』などに頼りながら、サツマイモにあるさまざまな長所を紹介し、わが国でもその栽培を盛んにしなければならぬとするものだった。

しかもそれには「サツマイモに毒はない。それどころかヤマイモと同じで薬にもなる」とあった。それで將軍も大岡越前守も喜んだ。

江戸市中では、享保大飢饉前からサツマイモの売買がおこなわれていた。だが、それには毒があるという俗説が流れたため、それを買ってまで食べる人がいなくなっていたからである。

## ◆ 青木昆陽のサツマイモ試作

『蕃薯考』を読んだ將軍と町奉行は、さっそく昆陽に江戸でのサツマイモ栽培をさせてみることにした。だが、昆陽には農耕の経験がまったくない。それでどうしたら良いかをいろいろ考えているとき、長崎の人でサツマイモ栽培も上手な人が江戸に來ているという朗報が入った。

それでその人と昆陽の二人を組ませ、江戸城内の吹上の庭で一緒にサツマイモをつくらせることにした。その結果は上々で、立派なイモがたくさん取れた。昆陽もサツマイモ栽培の要領を掴むことができた。

それで安心した將軍と町奉行は、その翌年の一七三五（享保二十）年のこと、昆陽に江戸小石川の菓園とその隣りの養生所の二か所で、サツマイモの試作をさせることにした。昆陽はそこで一人だけでのサツマイモ試作をおこない、両所とも見事に成功してみせた。

それだけではなかった。予備の試験地とされた上総の国、不動堂村と下総の国、馬加村にあつた江戸町奉行与力給地内での試作にも成功した。幕府も大喜びとなり、関東だけでなく、わが国全体でのサツマイモ栽培を積極的に奨励するようになった。

また昆陽は、幕府に仕えることのできる身分となり、学問上のさまざまな研究を進めることができた。

江戸時代の  
大飢饉では、  
たくさん  
の  
餓死者や  
離村者が  
でた。



享保二〇年(1735)、青木昆陽(37歳)は  
サツマイモの試作に成功。

江戸の  
小石川御薬園  
内と、その中に  
開設された  
「養生所」内  
(2カ所)



## ◆ 武蔵野台地の開拓

広大な武蔵野台地の多くは江戸幕府の直轄地だったが、川越城の南の一部だけは川越藩領になっていた。そこは火山灰土で厚くおおわれた瘦せ地<sup>や</sup>だったし、井戸の一本も掘るのにも莫大なお金が必要なところだった。それで永い間、人家もない寂しい原野のままだった。

それでも江戸時代になって戦乱の恐れがなくなると、開拓希望者が続々と入ってきた。その人たちは低すぎる地力に驚き、あきれた。それでも糠<sup>ぬか</sup>や灰などの購入肥料には、できるだけ頼らないようにした。それぞれの開墾地のそばに、落葉広葉樹で成長の早いコナラやクヌギの苗を植えた。その落ち葉を毎年の冬、熊手で掃き集めては大きな竹箆にぎゅうぎゅう詰めた。それを自宅そばに作った堆肥作り場に運び、高くなるまで積み上げた。その上に台所や風呂場などから出る捨て水を掛けた。さらに、ときどきそれを切り返した。それはその順調な発酵を促すためだった。

すると二年ほどで使えるようになる自給肥料の「落ち葉堆肥」がたくさんできた。そのために必要とされた人工の平地林面積は、「一反の畑には、一反の平地林」とされていた。武蔵野台地の開拓には、それほど多くの人工林が必要だった。

農家はその落ち葉堆肥で年々、地力を上げながら自家用の大麦と販売用の小麦を作った。水田地帯の農家の年貢は物納で、コメで納めなければならなかった。

だが、水田が一枚もない武蔵野台地の農家の年貢は、現金で納める金納制だった。だから農家は、そのための換金作物を探さなければならなかった。それで頼りになったのが小麦だった。小麦は江戸のうどん屋やそば屋、菓子屋などにとっての必需品だったから、買い手は

いくらでもいた。

だが夏作には頼れるほどの換金作物がなかった。それで自家用の陸稻・粟・稗・サトイモなどを作るしかなかった。だから農家の暮らしはいつまでたってもよくならなかった。飢饉の年には夜逃げをする脱落者も出ていた。

#### ◆ 川越イモの元祖、吉田弥右衛門

川越藩領だった南永井村（所沢市）の世襲名主、吉田弥右衛門は情け深い人だった。自分の村の人びとが、いつまでたっても苦しい生活をしているのを見て、なんとかしてやりたいと思っていた。

一七五一（寛延四）年のこと、弥右衛門はその窮状を知り合いの川内屋八郎兵衛に打ち明けた。江戸木挽町の薪炭商だったその人が同情し、こんな知恵を授けてくれた。

「それなら、みんなにサツマイモを作らせてみたらどうかね。上総の志井津村にサツマイモ作りの上手な長十郎さんがいる。そこへ行ってみないか」となった。

弥右衛門はそれを聞いて喜んだ。さつそく息子で二十六歳の弥左衛門をそこへやり、サツマイモの栽培法と種芋の冬の貯蔵法を学ばせた。そして帰りにサツマイモの種芋を買ってこさせた。

それでさつそくその年からの、吉田家親子によるサツマイモの試作が始まった。その結果は上々だった。そして関東ではむずかしいとされていた種いもの冬の貯蔵にも成功した。そ



青木昆陽による馬加村（千葉市幕張）でのサツマイモ試作技術が、それから16年後に旧川越藩領の南永井村（所沢市）に伝わり、川越いも発展の礎となった。  
 詳細は本書133ページ「川越いもの作り初め」を参照。

これで喜んだ吉田家は、イモ苗をたくさん作り、自分の村だけでなく近所の村々にも配った。おかげで川越地方でのサツマイモ栽培も盛んになり、飢饉の年でも夜逃げをするほどの人はいなくなった。そのことへの感謝の気持ちから、やがて南永井地方の人びとは吉田家を「サツマイモの元祖」として敬うようになった。

それから二百五十五年もたった二〇〇六（平成十八）年のこと、地元の神明神社境内の中に青木昆陽と吉田弥右衛門の二人を神様として祀る「境内社」甘藷乃神<sup>いものかみ</sup>が造営された。また、そこには铸造の「なでいも」が設置されている。

四代目名主・吉田弥右衛門 よしだやえもん

いまでも

吉田家には、弥右衛門が

書いた覚書が

残っている。

1751年・南永井村  
川越いし作り始め



青木昆陽と吉田弥右衛門  
をまつる「甘諸乃神」

三富・富岡総鎮守 神明社氏子会

平成十八年十一月二十三日